

町史だより

マチ(市場)までの道

健康のためウォーキングに励んでいる方を多く見かけますね。運動不足の積み重ねが病気の誘因となることは皆さんご存じの通り。すっかり車社会となつてしまつた沖繩では歩く事がめつきり少なくなつてしまいました。私も反省しきりです。

さて、町内のお年寄りから話を聞いていると戦前の人々は随分とよく歩いてたことがわかります。戦前の人々のほとんどは農業を中心に生活し日用品を買うためには自家で生産した芋やウージガラ(さとうきびの搾り殻。燃料となる)、獲った魚などを与那原や首里の市場で販売し、換金していました。翁長出身の比嘉春潮(一八八三〜一九七七)が『翁長旧事談』で「みな供給者で需用者がいない。買い手のいる那覇や首里、与那原の市場までもつていかねばならぬ。首里へ一里、那覇へ二里、与那原へ半里の路を、女は頭に男は天秤棒で芋や豆を運んで行った」と述べているように西原の人々はよくマチに行きました。

与那原のマチといえは現在の新島区や中島区、首里

のマチといえは汀志良次(テイシラジ)をさし、現在の鳥堀交差点近くにありました。与那原のマチへは、主に現在の国道三二九号を南下して行きましたが、汀志良次マチへは後に述べるように起伏の激しい道を行かなければなりませんでした。しかも五〇〜六〇斤(三〇〜三六kg)もの芋を背負つて行つたといひます。

汀志良次マチまでは、主に二通りの道がありました。一つ目は、戦前、村役場のあつた付近(現在の西原の塔付近)から出発すると、刻時森(字幸地のタンクのある小丘)の脇を通つて谷那堂橋の側、石嶺中学の南側、首里中学の背後に至つて汀志良次マチに到着するルート、二つ目は、現在の呉屋バス停近くの信号から小波津に入り、桃原構造改善センター側の道路を通つて、池田の交差点を弁が岳の頂上方面へ真つ直ぐ行くルートです。

当時は現在のように整備された道路ではありませんでした。また、行きは重い売り物を持ち、帰りは売つたお金で酒や醤油などを買って持ち帰つたと言いますから、歩くことはすなわち生活をしていく事と同じだったのです。